

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 近藤悠人

①学習成果

今回の研修テーマである「ヨーロッパとアジアにおける紛争と平和」と関連して、平和構築のプロセスとしての東アジア共同体の形成の可能性について発表しました。欧州連合からの離脱運動が熾るなか、EU形成の経験と現実を踏まえた上での発表でした。それ故、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の先生や学生方の関心も一際高く、発表後のディスカッションにおいて、実際にEU圏内に居住している彼らの積極的かつ率直な質問や意見を伺うことができました。他方で、英語のリスニング・スピーキング能力や、自分の意見を論理的に明確に主張する能力が不足していたため、意志疎通が上手くいかない場面も度々ありました。今後こうした能力の涵養を課題として改善に努めていきたいと思えます。

また今回の研修を通じて、前回参加したタイ研修の時よりも「国際理解」に対して一層深い洞察を得ることができました。今後も今回の様な機会を積極的に利用して、国際理解の深化に努めていきたいと考えています。

②海外での経験

初めての欧州訪問ということもあり、日本とは異なる日々には驚きの連続でした。独仏両国の代表的な都市の訪問を通して知と伝統を重視する欧州文化に直接触れ、心動かされることが度々でした。また発表テーマがEUと関連していたため、EU圏内独自の出来事に目を向ける機会も屡々ありました。特に、シェンゲン協定加盟国間のビザなし移動や周辺諸国からの多様な労働者の移入、同一通貨ユーロの利用といった、EU圏内のヒト・モノ・カネの移動の自由化に伴う現象には目を見開かされる思いでした。一方で、両国の街角では移民・難民問題の片鱗を感じる機会も多々ありました。振り返ると、欧州統合の理想と現実を肌で感じる毎日でした。

ハイデルベルク大学やストラスブール大学では、バックグラウンドの異なる学生や先生方と接する機会が多く、日本の大学以上に多様性に富んだ知的環境に魅力を抱きました。また両大学の学生の方々の学術レベルの高さや、将来に対する展望には唯々圧倒されるのみでした。彼らの能力や姿勢を見習い、将来に向けてより一層努め励む必要があるとも再認識されました。

③プログラム内容

ハイデルベルク市内の見学について述べたいと思えます。ハイデルベルク大学と周囲の市街地の見学を通じて、大学と周囲の市街が一個の有機体として長い歴史を紡ぎ続けてきたことを肌で感じました。特にネッカー川と並行して走る哲学の道やハイデルベルク城、旧市街中心部の聖霊教会から市内全景を望んだ際には、赤色の屋根で統一された建築物が整然と並ぶ、伝統と格式あるドイツの都市としての雰囲気を感じることができました。また Dokumentations- und Kulturzentrum Deutscher Sinti und Roma での学芸員の方の熱心な解説や、「躓きの石 Stolperstein」「焚書 Bücherverbrennung」記念プレートの設置、それらのプレートに関する見ず知らずのドイツ人の自発的な解説なども強く印象に残りました。輝かしい歴史のみならず、こうしたナチス時代の負の歴史も真摯に見つめ直し、後世に広く伝えていこうとする姿勢を垣間見ることができました。

加えて、日本語学科への訪問と先生方からのお話から、長年に渡って日本へ関心が強く持たれ続けてきたことも学びました。実際その後何った大学食堂において、日本語の学習ノートや単語集を開いて熱心に学ぶ学生の方々の姿が見られました。また彼らの中に、政治的関心から日本語を学ぶブルガリア人学生も含まれていたことに大変驚かされました。更に先述した記念館の学芸員の方からも、差別撤廃という点で共通点のある全国水平社との連携関係について詳しいお話を伺いました。一見日本から遠く離れている様に思われる欧州からも、多様な視点から日本へ関心の目が向けられていることを実感しました。他方で、京都大学欧州拠点の見学を通じて、ハイデルベルク大学との協力関係を基盤として、京都大学から欧州、特にドイツに強い関心を抱いている学生の派遣が盛んであることを伺いました。ハイデルベルク大学を中心とする欧州の諸大学との相互協力によって、京都大学の国際化が進み、欧州との相互理解・協力の深化もより一層進めば、と思われました。

④進路への影響

9日間という短い期間でしたが、ハイデルベルクとストラスブールという特徴ある都市と大学を訪問することができ、非常に刺激的な研修となりました。今回の貴重な経験を糧にして、今後の留学・進学・就職などについて総合的に考えていきたいと思っています。

今回の研修と一緒に参加して頂いた京都大学・ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の先生方、学生の皆様を初めとして、今回の研修実施のためにご尽力頂いた全ての方々に深く感謝致します。